

飯豊連峰保全シンポジウム

議事概要

日 時：2008年2月23日（土） 13：30～16：45

場 所：山形県小国町 おぐに開発総合センター 集会室

■開会

進行役 川端：

ただ今より飯豊連峰保全シンポジウムを開催いたします。私、本日の進行役を務めさせていただきます、株式会社ニュージェックの川端と申します。よろしくお願いいたします。

（拍手）

最初に皆様にご報告させていただくことがございます。

本日午前中に飯豊連峰保全連絡会設立会が開催され、その場で飯豊連峰保全連絡会の設立が承認され、代表に関川村山の会会長の平田大六さんが就任されました。

本シンポジウムは、飯豊連峰保全連絡会（仮称）の発起人が中心となって準備を進めてまいりましたが、先ほどの飯豊連峰保全連絡会設立会の場で、今回のシンポジウムを最初の事業ということでやろうと決まりました。

このシンポジウムの主催は飯豊連峰保全連絡会ということになりました。ここにご報告させていただきます。

■主催者挨拶

進行役 川端：

それでは、主催者を代表して飯豊連峰保全連絡会平田代表より、ご挨拶を申し上げます。

飯豊連峰保全連絡会代表 平田氏：

ただいまご紹介にあずかりました、私、平田大六が、飯豊連峰保全連絡会の代表を仰せつかりました。新潟県、関川村山の会に所属しておりますけども、よろしく願いいたします。

3時間ほど前に、この会が発足したばかりで、私も3時間ほど前に代表になったばかりでして、まだまだ分からないことがたくさんございます。従いまして、先ほど司会の方から詳しく経過報告がございましたが、そのとおりでございます（笑）。よろしく願いいたします。

飯豊連峰は福島県、山形県、新潟県の3県にまたがる日本有数の山岳地帯で、すっぽり国立公園となっております。

近年は、利用も多く、他の山と同じく、自然保護に力を入れなければなりません。これに取り組んで行くのが、飯豊連峰保全連絡会でございます。

先ほど、保全計画を決定いたしまして、いろんな問題を皆で考えながら、自然保護、利用を進めていきたいと思っております。ボランティアの気持ちで発足したものですから、どうぞよろしくお願いいたします。

今日で終わりでなしに、今日から始めるということで、皆様のご協力を賜れば幸いです。よろしく願いいたします。

(拍手)

進行役 川端：

平田さん、ありがとうございました。

続きまして、本日の開催地、小国町の加藤副町長がいらっしゃってますので、一言ご挨拶をいただきたいと思っております。加藤副町長、よろしく願いいたします。

小国町副町長 加藤氏：

皆様こんにちは。

(こんにちは、の声・拍手)

ご紹介にあずかりました小国町副町長の加藤春雄と申します。

町長が来てご挨拶をする予定でございましたけれども、所用で出席出来なくなりましたので、代わって私から歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。

今日は、飯豊連峰保全シンポジウムということで、ここ、白い森の国 小国で開催していただくこととなり、大変嬉しいことでもありますし、光栄に存じておりますところでございます。

講師の山口先生をはじめ、パネラーの先生方、また飯豊連峰を愛する皆様には、大変な悪天候の中ではございましたが、また遠路、ここ、白い森の国へおいでいただきまして、心から歓迎を申し上げたいと存じます。またこれに先立ち、飯豊連峰の更なる保全、連携の場として飯豊連峰保全連絡会が設立されました。心からお祝いを申し上げます。

飯豊連峰は、多くの人々を魅了し、小国町民にとりましても、古くから山岳信仰、名湯 飯豊温泉が湧き出る山として親しまれてきました。豊かな自然はマタギ文化、ブナ文化に代表される小国独特の生活文化を育み、山菜をはじめとした森の恵みを与えていております。

また、昨年6月には、飯豊連峰の裾野にございます、ブナの森 温身平が森林セラピー基地としてグランドオープンしたところでございます。このことは、人と自然、人と森との共生を町づくりの基本理念としております小国町にとりまして、この上ない喜びでございます。

しかし、ただ今もお話ございましたけれども、私たちが様々な恩恵を享受しておる一方で、図らずも、いろんな要因による荒廃も進んで来ております。

飯豊連峰の保全は大切な課題であります。今回、これをきっかけに、国民の財産、我々の財産として、飯豊連峰に取り組んで行ければ大変嬉しいことだ、と期待をしております。

本日は誠にありがとうございました。

(拍手)

進行役 川端：

加藤副町長、どうもありがとうございました。

■「飯豊連峰保全計画（案）」検討の経緯

進行役 川端：

それでは、飯豊連峰保全計画（案）の検討経緯について、環境省東北地方環境事務所の佐藤さんからご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

環境省 佐藤：

私、環境省の羽黒自然保護官事務所、佐藤一交と申します。

本日は僭越ながら、飯豊連峰保全計画（案）検討の経緯と題しまして、これまで2年間行ってきた飯豊での取り組みをご説明させていただきます。

（以下、随時スクリーンにて説明：割愛）

以上で、飯豊連峰保全計画（案）検討の経緯の説明を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

進行役 川端：

佐藤さん、どうもありがとうございました。

■基調講演 「わたしの山の楽しみ方」

進行役 川端：

引き続き、基調講演に入っていきたいと思います。

講師は山口義雄さん、テーマは「私の山の楽しみ方」です。

山口さんは、1944年茨城県のお生まれです。20年ほど前から朝日連峰の小国側の登山道の整備に関わり、現在、朝日登山道刈払い隊隊長として活動していらっしゃいます。

では山口さん、よろしく願いいたします。

(拍手)

講師 山口氏：

ただいまご紹介いただきました、茨城から来ました山口と申します。よろしく願いいたします。

(拍手)

今日は、飯豊連峰保全シンポジウムという、学際的な会合にお声をかけていただいておりますが、私の方はまったく泥臭くて紹介するには気恥ずかしいというようなことしかしておりません。それと私は茨城弁がきつくてお聞きにづらいと思いますが、45分ということで、おつきあいの程、よろしく願いいたします。

先ほど、佐藤さんから飯豊連峰についてはいろいろご説明いただきましたけれども、そのようなものを痛めずにどう次の世代に引く継ぐかということで、今日この会の設立となったわけですが。小国では、飯豊を南、私に関わっている朝日を北と言ってるようでして、北（朝日）の方にはこういう組織はありません。どのように維持管理されているかということ、管理人という方、現在、斉藤初男さん（山形県委嘱の朝日に係る自然公園管理員のお一人）、がおられます。通常はその人が、パトロールしたり、気付いたところを修復したり、というような形でやられています。それに対して、私、私の仲間、朝日で遊ばせてもらっているのも、何か出来ることがあればと始め、草刈りのお手伝いみたいなことをさせていただいています。それが20年ほど前から、ということです。

最初はほんの出来心というか、気紛れというか。それはどういうことか言うとはですね。私が朝日に来たのは昭和47年のゴールデンウィークでした。イワナを釣ってみたいと思い、釣りの雑誌とかガイドブックを買って、全国紹介されているんですが、1箇所につき1枚の写真が載っていました。見ていると、荒川の写真というのが1枚ありました。今思えば、中流とか上流に行きますと、マス止めの滝というのがあるのですが、その辺を写した写真でした。それがとっても魅力的な写真でした。で、この川に決めて、徳網のところに第一堰堤、今もありますが、そこが朝日平キャンプ場ということで載っていました。小さなガイドブックとか地図にですね。

朝日平でキャンプしながら1週間いたのですが、イワナは正直、あまり釣れませんでした。毎日、食べる分は釣れたんですが。というのも私に技術が無かったんですね。

講師 山口氏（つづき）：

元々山が好きでしたので、そのガイドブックに、徳網に伊藤さんという方がいらっしやって山のことをいろいろ世話をしている、とありました。毎日イワナ釣りも飽きましたので、伊藤さんを訪ねまして、ちょうどいらっしやって、朝日の山のことをいろいろ聞きました。

次にイワナ釣りをやる時は誰かお師匠についてやろうと思い、イワナ釣りは封印していました。それで山に登っていたのですが、ある時、十数年してからですね、職場でフライフィッシング、ルアーフィッシングをする友人がイワナを釣りたいということで、その友人を連れて南アルプスの天竜川の支流 遠山川の奥の方にイワナ釣りに行きました。

山に登る方ならご存知でしょうが、光（てかり）岳ってありますよね。あそこは一つだけルートから外れていて、なかなか登る機会がなかったんです。下調べしてまして、私の持っていた昭和40年頃の5万分の1の地図にはルートがあるんですね。それで南信濃村（当時。現 飯田市）に、最近このルートどうですかと聞いたら、廃道ですと。で、下の方は植林をしたんで途中までは山仕事の道があります、山慣れた人ならその上も歩けます、という話でした。

で、友人と私の息子と3人で山登りと釣りに行きました。友人はテントに泊まって釣り。私は息子と山小屋に泊まって帰ってきました。下りてきたら、友人はイワナがいっぱい釣れたんですね。それで、もっと別の川に連れて行ってほしいと言われたもので、じゃ来年のゴールデンウィークは昔行った荒川に行こうか、ということでまた朝日に来ました。

5月頃だったんですが、釣りをしたら一尺ものが結構釣れました。友人は病みつきになりましたししばらく通っていました。私も一緒に来てたんですが、私は山に登りたいんですね。それで、三面口から朝日に登って、徳網に下りました。朝日から下りて平岩山に行くんですが、今は廃道になってるんですが、平岩山のてっぺんを歩かないショートカットがあったんです。そこを通ったら、手入れが悪くて、ハイマツが邪魔になって、草も生えてましたし。

そのことを後日、民宿をやってる伊藤さん（前出の伊藤さんの息子さん）に酒を飲みながら聞いたら、実はそこは俺の責任で道刈りをしている、という話になりました。どうして手入れが悪いんだ、と聞いたらですね、昔は声をかけると草を刈ってくれる人が集まった。最近は皆町に仕事に行ってるので人がいないんだよ、という話をされました。

それなら、私も手伝いますよ、と。それで、角檜小屋から大股沢の辺りまで、次の年にやってみたんです。草刈り機の燃料を十分もらってたはずなんですけど、私は空ふかしばかりしてガソリンが無くなっちゃったんですね。草刈り機は初めてだったもので。それにも関わらず、喜んでくれまして。酒なんかもいただいて。そうすると、単純なものですから（笑）、またやってやろうかな、と。その後は、父つつあん（伊藤さん）と斉藤さん、私とで草を刈りに行くようになりました。そんなことをしている時、私は草刈りはしないんですね。斉藤さんとか伊藤さんの荷物を背負って、食料を持って、酒を持って。そういう歩荷（ぼっか）的な仕事の方が私にはずっと合ってるんです。そんなことをしながら、蛇引（じゃびき）の清水に泊まった方が効率がいいもんですから、蛇引の清水に泊まったり、大朝日の小屋に泊めていただいたり。

講師 山口氏 (つづき) :

そうしているうちに、父つっあんは民宿やってますからお客さん来ますよね。国立のおじさん、70才くらいだったかな。それと、茨城県生まれで農学博士だという方、研究者ですね、80才近くだと思えたんですが。父つっあんが、その人達一緒に酒を飲みながらですね、山口さんと一緒に山に入ると荷物を全部持ってくれるから、体一つで山に行けるよ、と(笑)。

それで一緒に登って、彼らも喜んでくれました。歩荷付きですし、タダですから(笑)。

そうこうしているうちに、私の仲間も、釣りばかりでなくて山にも登りたい、ということになって、山と一緒に歩くようになったんです。で、草刈りにも手を出す、段々人数も増えてきました。そうするとルートも分担出来たり。現在は、2-3班、4班くらいに分けてやります。

そうこうしているうちに、草刈り以外にもやれそうなことが幾つもあるんですね。そんなことを手がけているうちに、現在に至って、いつの間にかこんな所に立って皆さんの前で話をしたい、ということになってるんですが。まったく我々は素人集団ですし、ただ物好きで来ているだけです。ですので、今日呼んでいただいて、上手い説明が出来るかどうかとても心配しています。今、ドキドキしています。

それで、ちょっと映像を用意しました。我々が日頃やっていることを見ていただいて、時間の範囲でいろいろ説明させていただく、ということにしたいと思います。

(以下、随時スクリーンにて説明)

昭和43年頃、草刈り。

平成4年頃、仲間が増えてきました。

平成8年、角檜小屋が老朽化していたので、発起人になってカンパを募って改修。

...

インターネットで紹介しはじめて、京都から来てくれる方もいます。今、草刈りは、夏シーズンの前、7月にやっています。

で、斉藤さんに「肩書き」をもらいまして、道刈り隊 隊長ということ。私の前職は決まりきったことをやる仕事でして、山に来てまで規則に縛られたくない。ただ、怪我と弁当は自分持ち、現地集合・現地解散です。

飯豊では、各関係者が集まったわけですが、ゆくゆくは北(朝日)の方も。けど、それは次の世代へお願いしたいと思います。

講師 山口氏（つづき）：

飯豊でも草刈りがあると思いますが、大勢の人が要りますし、あまりお金をかけずにやりたいというのがあります。私はホームページで募集しています。

初回の人に労力は期待していません。ガイド付きで山を堪能、理解してもらおう。草刈りをしなければならぬ、じゃない。個人装備は自分で持ってもらいますが、他は私たちが持ちます。また来てくれて、2〜3回になると、「私も草刈りをしたい」となりますので、平場なんかの草刈りを頼みます。満足して帰ってくれます。今までと違う、ただピークに登って下りてじゃない。今までと違った山が見えてくるんじゃないかと思います。

初回の人、体力がない人には、角檜小屋ベースでブナ林を見たり、飲み食いをしてもらって、もっと行きたくなったら体力をつけてもらって、蛇引の清水、稜線の山小屋へと行ってもらう。

ボランティアで来てもらう何か「売り」があるといいですね。例えば、温泉に無料で入れるとか。朝日では草刈りの後、皆さんに小国町の施設でお風呂に入ってもらっていますが、100円でも、200円でも割引があるといいなと思います（笑）。

私は60才で退職したのですが、70歳まで山に入れるだろうとトレーニングもしていますが、将来のために後継者を探して育成したいと考えています。40〜50歳のイキのいい意欲ある人が良いのですが。いっぱい参加してもらってますが、まだそういう人が見つかりません。

私はあまりボランティアという言葉は好きでないんです。参加してくれる人にも聞いてみたのですが、「ボランティアじゃない」、「その山に行ってやるのが嬉しい、癒される」といった意見があります。ボランティアというと「人のために何かしてあげる」という気持ちでしょうが、そういうものでない。

朝日より飯豊の方が、いろいろ、森林セラピー基地などもあって、北（朝日）よりも南（飯豊）の方が売れていると思います。もっともっと人が来るんじゃないでしょうか。

だいたい時間が来たようですので、これでよろしいですか。

あと、後ほどですね、いろんな時間が設定されていますので、その時機会があれば内容を詳しく話していきたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

（拍手）

進行役 川端：

山口さん、どうもありがとうございました。

それではこの後、パネルディスカッションに入りますけれども、会場のセッティング等ありますので10分ほど'休憩をとりたいと思います。3時から始めますので、3時までにお席にお戻り下さい。

（休憩・セッティング）

■パネルディスカッション 「連携で伝えよう飯豊の自然」

コーディネーター 川端：

それではパネルディスカッションに入りたいと思います。

テーマは、「連携で伝えよう飯豊の自然」で、今日のタイトルになっておりますものです。

パネラー、4名お越しいただいております。左側から、山口義雄さん、松本清さん、平田大六さん、井上邦彦さん、コーディネーターは私、川端です。

最初に論点を整理すると、

- ・飯豊はどういう山であってほしいか。
- ・どのように連携していくか。
- ・登山者がどう連携に係わっていくか。

1人10分程度で、山口さんは講演していただいたので、平田さんからお願いします。

パネラー 平田氏：

飯豊の登山の初期の頃の話をしてします。私は1933年生れで、1950年代、20才頃から登山をしています。昭和でいうと30年代、第2次登山ブームが起きていた、と専門家は言っております。1950年代は、日本の山岳隊がマナスルに戦後初の海外遠征、井上靖が朝日新聞にナイロンザイル事件を題材とした「氷壁」を連載し、登山というものが一般に知られるようになったと思います。

飯豊の方は、藤島玄さんが1900年代前半から飯豊縦走をしており、1950年に国立公園になりました。その後1964年に、第19回新潟国体で飯豊も会場になりまして、登山道等の整備も進みました。1961～1965年にかけて、主稜線に、えぶり差小屋、門内小屋、梅花皮小屋、御西小屋が整備されました。それ以前は本山の小屋だけでした。また、北部に新たに、東俣（権内尾根）、胎内尾根、足ノ松尾根、西俣ノ峰の4ルートが開設されています。

当時は、山の木を切って火をたいたり、それで山小屋に燃料有りとか表示したり、そういう時代でした。空缶、瓶、新聞なども落ちていました。登山道が荒れる、荒らす、とか考えられない、考えていませんでした。その後、今起こっているような問題が現れてきました。これは、1つには山に入る人が増えているのが大きな原因でしょう。当村のえぶり差岳で年間3,000人ほど。

何とかしなきゃいけない。そういうことになって来たのであろう、と。ここ50年を振り返ると以上のような感じです。

(拍手)

コーディネーター 川端：

では、井上さんの方から。

パネラー 井上氏：

井上です。よろしくお願いたします。

(拍手)

私の祖父は長井市の僧侶でして、出羽三山の先達を勤めていたということです。まあ、山伏ということです。

私は1951年生れですが、15才の時に出羽三山に登り、高校の時に飯豊を縦走しました、大学では山岳部で、ヤブコギ、ラッセルとか、単独行に興味がありました。自然保護研究会にも入って、生態系、国立公園について勉強をしました。

小国に帰って来て、山岳救助も行うようになりました。山岳救助隊は、飯豊班、朝日班に分かれておりまして、熊狩り・マタギの人達に係わるようになり、遭難救助して酒盛りといった彼らの影響(笑)を受けました。

また、小国に帰って来たというのは小国町役場に就職したということですが、それで山林地域のことも考えるようになりました。

ですから私の山の考えの基は、・宗教登山、・山岳部、・自然保護、・狩猟、・山村開発が絡まってあるわけです。

自然の保全とは何か？ 例えば反体制、何もしない、ではないだろうと。自然の治癒力と人の作り出した制度を利用するものではないか。ニュージーランドに視察に行きましたが、自然保護の仕方は1つではない。面積・規模、生態、制度、歴史といったことを考えなきゃいけない。画一的でなく、その場所にあった方法を常に模索していくべき。

1970年代に飯豊の山小屋の管理人に話を聞いてまわったのですが、登山道に係る役場の担当課も決めてあったとのことですが、この時点でそれを知っている役人はいませんでした。

殊に、えぶり差岳ー大石山間が空白で、管理者が誰もいない。北股岳ー御西岳は新発田市担当と聞いたが、何もされていない。それで、私たちは遭難者を担ぎたくないものですから(遭難を防止したい、の意)、市がやらないなら道刈りを自分達でやる、ということになりました。また、1年に1度、遭難対策合同会議として、飯豊関係者が集まることにして、数年経ちます。

私が考えました計画・スキームはこういうものでして(スクリーン使用)、安全というのは遭難者をあんまり担ぎたくない(遭難を防止したい、の意)、快適というのは昔の山小屋は不潔でしたので。それと山には感動が必要だろうということです。

踏圧・幕営圧による荒廃をどうするか、北俣岳ー御西岳間では滑落しやすいし荒廃もしているということで今までもいろいろやってきました。

コーディネーター 川端：

では、続いて松本さんから。

パネラー 松本氏：

私は、巻機山で31年間ボランティア活動をしてきました。まあ、山口さんはボランティアという言葉が嫌いということでしたが、この言葉使わないと先に進まないんで（笑）。連携というのは積み重ねの中でのことだと思います。

巻機山の自然環境は多雪の点で飯豊に類似しています。オオシラビソといった針葉樹林があるところが違います。場所は新潟と群馬の境界です。ただ、群馬側では道が無いので自分の山という感じは無く、新潟側は県立公園になっています。

私は(財)日本ナショナルトラストに勤めていたのですが、実態調査から始めました。スタート時は、乱暴なこともやったのですが（笑）、ボランティアでも出来るかな、という感触を持ちました。技術・労力は農大、学生が提供、資材は塩沢町（当時。現 南魚沼市）。まだこの頃は県は係わっていなかったんですね。普通、役所という動きが悪いのではと思うんですが、塩沢町はよく対応してくれました。それでナショナルトラストが全体コーディネーター、というのが最初の連携・体制です。市民ボランティアとして始まったのではないんですね。

数年やってると、新潟県も対応し始めてました。県外者が来ていろいろやってるわけですから、県立公園管理者として何かしないと、ということ。

我々の経験に基づいて県に意見を言う。県の方も我々に聞いて来る。県は今までの蓄積が無いですから、分から無いんですね。見続けてきた我々の目が必要なわけです。それで施工業者、実際にやる下請けさんが現場に来て確認し合う。ボランティア、行政、業者の役割分担がはっきりしていました。ボランティアがやりやすいように資材を上げておいてもらう、とか。

県の事業は去年で一段落しましたが、その後も活動計画・報告を県に行い、常に県と交流を図っています。

(拍手)

コーディネーター 川端：

では、議論に入りたいと思います。まず、飯豊をどういう山にしていくのか。ワーキングでも議論されてきました。ワーキングメンバーだった井上さんから。

パネラー 井上氏：

ケースバイケースでの活動が必要。飯豊には飯豊らしさ、個性、が必要だと思います。

例えば、登山道がコンクリートで舗装されていたり、朝日の銀玉水から上部の石畳というか石で作られた階段、それから松本さんがいらっしゃって大変失礼なんですけど、巻機山のよ様に木道が続いている、というのは飯豊らしいか？ということです。

飯豊は痛んだところを修復して自然治癒に任す。今まであまりにも公共事業的、いろいろな要素に応じた作業が必要なのに、下界で理論に基づいて設計・施工してきました。もっと細かく対応が必要だと思います。

ではどうしたら出来るか？というと、行政の力だけでは出来るものではない。いつも見ている人達が自らの手で、勉強して、修復して、それを広めていくのが一番いい、という結論になったと思います。

今回の連絡会の仕事は、勘違いして欲しくないのは、行政の経費を削減するために私達が仕事するのではない、ということです。それが目的ではない。現場ですり合わせしていくことによって、その山にマッチした工法、自分達が知恵を出し合って自分達で施工していくのが大事なんだろう、と考えています。

それと、今回の飯豊連峰保全計画書の中に極めて重大な言葉が入っていたと思います。「自己責任」です。奥入瀬溪谷事件以来、日本の山岳が非常におかしな事になってるんじゃないか。結果として、行政の過剰整備が見受けられるのですが、飯豊に登るには飯豊に登る覚悟で来いよ、ということです。登山者の自己責任が盛り込まれているのが、今回の大きな特徴だと思います。

コーディネーター 川端：

だいたいワーキングでどういう話をしてきたか、ということはお分かりいただいたと思います。この後はフリートークで、どういう姿であるべきかということでお話していただければと思います。

パネラー 松本氏：

自然治癒力を生かせ、という話ですが。自然はヤワじゃない、という所もあります。一方で本当に駄目な所もある。30年見て来て荒廃したまままったく変わらない所があります。そういう所は人為、人が手を貸す、ということも必要だと思います。いつも見てる人達の目が重要です。行政というのは極端なところがあって、やり過ぎか、何もやらないか（笑）。

本連絡会は、横の結びつきがしっかりして、かなり画期的なことだと思いますね、私から見れば。我々は全然そうでなかったですから。こういう形で結ばれてスタートできるのは羨ましい。こういう形があれば、例えば、井上さんがリタイアしなければならなくなった時でも、こういう形が維持されていれば、後継者がちゃんと流れに乗って活動を展開できますから。この会の立ち上げは非常に良かったと思います。

パネラー 井上氏：

治癒力ですけど。床ずれで背中にサランラップを巻くと直るということがあります。皮膚からの分泌物が留まって直してくれる。植物もどこまでやればいいのか、ほんのちょっとやれば直るということもあるので、実証試験を踏まえながらやっていきたい。

我々が良いというのは、片手間で仕事ができる。つまり、山に行ったついでに手入れが出来るということです。

あと、我々のような組織でない、実証試験などに参加していただいた方の意見も聞きたいと思います。

コーディネーター 川端：

今、「飯豊らしさ」というものが、どういうものなのかということで話を進めてきました。

皆さんで共通認識というものを持ちたいということで、今の井上さん、松本さんの話を整理させていただきますと、

- ・飯豊は自然治癒力をそのまま生かしていく、今の姿をそのままにしていく
人間は最低限手を加えてあげるようなことをしていく。
- ・「飯豊はそういう山なんだ」と知って、皆さんが自己責任で登ってもらう。
- ・いつも山に登ってる方々が、いつも見ている方々が、そういう皆さんで守って行く。

そういう3点ぐらいだと思いますが。会場の方、何かご意見ありませんか。井上さんから会場の実証試験に参加された方から意見を聞きたいな、ということだったんですけど。

よろしいですか、では、もう少し話を進めて、連携の話をして、それからもう一度ご意見を伺っていきたくと思います。

ではどういう飯豊にしていくか、そのために連携していくという話が出てきてるんですけども、連携の話もワーキングでいろいろしてきましたので、ワーキングの様子を少し、井上さんから紹介いただけますか。

パネラー 井上氏：

今まで、行政、地域、団体といった縦割りが見られました。また、法的なものが足かせになっていました。今まで皆がそれぞれやってきたことについて、皆で調整・確認する機会が少なかったということです。

また、やりたいのにやる機会が無かった、という方々もいるんじゃないか。私は山に登らせていただいているんだから、恩返しをしたい、という気持ちで山に接してきました。

昨年、稜線での作業、荷揚げ等をしてもらった、会場にいる無所属の方にもご意見をいただきたいと思います。川端さん、よろしいですか。では、何人か指名させていただきますが、まず加藤さんから。

会場参加者 加藤氏：

加藤です。

(拍手)

飯豊には20歳過ぎに、3泊4日で湯ノ島から湯ノ平へ。こんな所があったのか、とすごく感動したことを憶えています。当時、梅花皮一御西は、草原・池塘でした。

30年、山から離れていましたが、また登りたいと思っていました。それで、井上さんのホームページを見まして、去年は10回ぐらい登りました。

登山道整備にも関わりたいと思い、飯豊は好きだけど1人で登るのはちょっと、という人もいて、皆で登ろうと。何人か集まりましたので、参加させていただきました。その3日間というのは、一言で言うと楽しかったです。1日目は今までに無い重い荷物を持って登りましたが、楽しかったです。整備なんて何をするのかと思ったが、植物の種で整備出来るなんて初めて知りました。

こんな小さい体でも集まれば飯豊に何かできるんじゃないか。飯豊の登山道整備に1人でもまた参加して下さるように、日々、歩荷隊も集めていますので、これからもいっぱいPRしていきたいと思います。よろしく願いいたします。

(拍手)

パネラー 井上氏：

埼玉県から来ていただいている、メール仲間では、頼母木山が大好きなんで、タモさんと呼ばれてる、伴場さんから一言お願いしたんですが。

会場参加者 伴場氏：

埼玉から来た伴場と申します。

私は飯豊が大好きで、1969年から登っています。

平田大六さんからご褒美に地図を貰ったりしました。シンポジウムに来た甲斐があったなあと。また来年になったら友達を誘って登山道整備に行きたいと思います。

登山道整備ということで、どんなことするのか、ゴミでも拾うのかなと思ったら違ったんですね。何をしていたか分からなかったんですが、丁寧に教えてもらって、この種を採るんだよと。で、夕飯、朝食、本当に豪華で、また来年も来たいという、そういう終わった時の印象でした。

井上さんはボランティアは楽しければいいんだよ、と言われて、それでいいのかな？と思っていましたが、今、山口さんのお話をきいて、これだったら皆に広められる、自然保護も出来るんだなと感銘を受けました。

本当に来て良かったなと思います。また、来年、ずっと、ずっと、来たいと思います。

パネラー 井上氏：

ご夫婦で参加いただいた、高橋さんにも一言お願いしたいと思います。

会場参加者 高橋氏：

新潟県から参加させていただきました高橋と申します。

私は20才頃、飯豊に登りました。それで、60才になってまた飯豊に登り始めたら、あれ、こんなに荒れていたのか？このままにしていたらどうなるんだろう？と思ったんです。

たまたま井上さんのホームページを見たら実証試験とありましたので参加しました。若い人に、感動、癒しを残していきたいと参加しました。山に登る楽しみだけでなく、お手伝いするという満足感が得られました。

ただ、山口さんが、遊び感覚で、とおっしゃったのはちょっと引かかるんです。飯豊は遊び感覚でお手伝いするという山ではないのではないか、という気がします。ま、山口さんの仰えるのは遊び感覚で来て、それから段々山を憶えていこう、それで先輩方が山は厳しいだよと教えていこう、と受け止めています。

これからも是非、飯豊に登り、そして自然を残そう、伝えようとお手伝いをしていきたいと思っています。

(拍手)

コーディネーター 川端：

今、会場から3名の方にお話いただいたんですが、その辺も踏まえて、パネラーの方に話を戻そうと思います。

連携のあり方について、山口さんもお話したいこともあるでしょうし、コメントお願いいたします。

パネラー 山口氏：

再登板です。肩もだいぶ暖まってきました（笑）。

今、私のことについていろいろ話がありましたけども。「怪我と弁当は自分持ち」、「現地集合・現地解散」と先ほど言いましたが、人を集める主催者は怪我が一番心配です。朝日での草刈りでは、エンジン付き草刈り機も使いますから危険でして、初めての人にはさせないようにとか。幸い今まで事故は1回も無いですが。

行政は責任に敏感ですから、こういうことは難しい。ただ、人を集めるには責任の所在がはっきりしないと無理です。

また、参加する人も危険に備える技量が必要で、中でも体力「バテない」ことが最低必要だと思います。

最近、個人のホームページなんかで見られるのですが、飯豊の梅花皮（大雪溪）を登ったとか書いてあるんですが、たまたま登れた人と、技量があって登れた人というのは違いますから。

連携というのは、過疎化する中山間地、地元だけでなく、都会の人も一緒にやろうということがあると思います。都会の人も元々地元・田舎の人間ですから。

それで、受け入れる側地元としては、そういう都会の人の技量や趣向に合わせ、コースやパターンをいくつか用意したらどうかと思います。あまり無理の無いように、例えば、初心者には温身平周辺、少し慣れた人には丸森尾根・梶川尾根とかですね。

パネラー 松本氏：

巻機山での連携の実態は大きく3つの流れがあります。

まず、農大。その学生ですね。

それで、16〜17年前、資材としてコモを大量に荷揚げする状況がありまして、1個1個は重くないですが、学生だけじゃ無理なんで、新聞・雑誌に一般募集をかけたんですね。まだインターネットは普及していない時代でした。一般募集で60人ぐらい参加してくれました。その時感じたのは、こういうことに参加したいという参加意欲が一般の登山者にもあるんだな、と。そういう機会が無いんですね。でも、そういう機会を作れば意外と参加してくれるんだな、というのが分かりました。

その後、次の流れは、農大の学生という中心戦力はずっと続くんですが、荷揚げの時は一般参加という形で、2〜3年やって、その後ですね。その時参加してくれた人達が常連化するというんですかね。定着しまして、多くはないんですが。戦力として数字が掴める部分なんです。学生はもちろん、研究室の学生なんで掴めるんですけど、一般の人はどれぐらい参加してくれるかは、なかなか掴みにくいところなんです。

常連化して定着してくると大体の数字が掴めます。そうすると、今年はこの辺まで活動出来るだろうと、ある程度の読みが出来ます。そういう形で変わって来て、今は、農大学生+常連組ということで進めております。

パネラー 松本氏（つづき）：

それで、今年また大量荷揚げの状況がありまして、飯豊ほどパワーのある人がいませんので（笑）、今年また募集かけようとしているんですが、今年は今日も来ていらっしゃるんですが、新潟県山岳協会さんにもお願いして、東京だけでなく、新潟の人も募って新しい形でやっていこうと思っています。

コーディネーター 川端：

ありがとうございます。

ちょっと時間の方、本当はもうお終わらなきゃいけない時間ですが、15分ぐらい延長させていただいて、まだ言い足りない方（笑）、お願いいたします。

パネラー 井上氏：

今、話しの中心が一般参加者をどうするかということですが、それと同時に、飯豊連峰保全連絡会の大きな役目の中に、今現在、個人、団体で山の維持管理や植生復元に携わっているという方が、この会場の中にたくさんいらっしゃると思います。そういう方の活動を今後どう担保していくのか、ということが、この連絡会の大きな役目ではなかろうかと思っています。

まず一つは、先ほど申し上げるように、法的な問題のクリアをどうするか。それから、やる技術を伝承、学んでいったらいいのか。それから、本当にやる必要のある場所とやらなくてもいい場所をきちんと整理をかけていかなければならない。

それぞれの方が、飯豊連峰では、善意の第三者としてたくさんの個人・団体の方がご活躍なさっていると私は思っております。ただ、それが現時点では、私をはじめ独りよがりのところがないだろうか。これを上手い具合に、バランスをとっていくとか、調整していくとか。そういうスタイルで、より良い、山に対する恩返しとか、そういうことが出来るんじゃないか。そういう視点からも考えていくべきではないか、ということでございます。

コーディネーター 川端：

あと、どなたか話をしておきたいという方。会場の方でも。

パネラー 井上氏：

組織、山岳会の方にも。

コーディネーター 川端：

どなたか、山岳会の代表の方でご発言いただければ。

会場参加者 高取氏：

大江山岳会の高取と申します。私どもの山岳会は歴史がありまして昭和 35 年創立です。そろそろ 50 年目を迎えようとしてるんですが。朝日連峰の東側、朝日町、大江町、西川町にあたる箇所です。山小屋管理とか登山道整備とか深く係わってきました。

それで考えてみますと、私の記憶では、3 町の山岳会で、全員で会合したことが 1 回もないと思います。まずは 3 町の山岳会代表だけでも会って、今回、このような会を見させてもらって、我々も近いうちに立ち上げたいなと思います。大変参考になりました。

(拍手)

コーディネーター 川端：

では、時間も過ぎておりますし、平田代表から。

パネラー 平田氏：

井上さんから、飯豊らしいやり方という提案がありました。非常に重要だと思います。

昔のことを思い出しますと、藤島玄さんに連れられて飯豊を歩きました。40 年も前です。藤島さんも、山を守るという考えを持っておられました。例えば、一服していると、この石をあそこに持ってけとか、水溜まりがあると棒で溝を作って流れるようにしたり。

1960 年代に作られた新しい登山道は、藤島さんと一緒に全て見ました。藤島さんが言うには、誰が伐開したかわかる、ということでした。あいつは、ケモノ道を利用して作ったな、掴める木を一本残しておいたな、とか。あいつは土建屋だから、まっすぐに伐開したな、とか。

それからあちこちで、スカイラインとかスーパー林道とか作られて来たのですが、法面から巾 100m に渡って植生が復元しない例の報告があります。

もちろん、山を日本人 1 億人全てが味わうべきだ、という思想もあるでしょうが、体力の無い人には無理ですよ、ということも大事じゃないかと思います。

連携については、国立公園指定時にも 3 県の国立公園協会がありました。これは行政だけですが。今回、行政も含めて広い層の連携ですから、非常にありがたいことであります。

登山だけでなく、行政にも活かしていきたいと考えています。

今日は、皆様方の貴重なご意見いただきましてありがとうございました。

2 年間、実験的にやってこられましたこの会の発起人の皆さん方にも、ぜひ、今日、大勢の皆様方から拍手をして下さい。ご苦勞様でした。

(拍手)

■閉会

進行役 川端：

では、パネルディスカッションを終わりにしたいと思います。

今日は、飯豊をどういう山にしていくか、共通認識を皆さん持っていただいたと思います。

これからも飯豊をずっとこういう山であり続けるようにやっていければと思います。

また今年の夏も活動があると思いますので、皆さん、山の上でお会いできればと思います。

今日はこれで終わりたいと思います。

(拍手)

以 上

【memo】